慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	学生相談室の利用状況にみる学生像
Sub Title	The student life seen by a student counsellor
Author	小川, 芳子(Ogawa, Yoshiko)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1981
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.26 (1981.) ,p.55- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	原報
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000026-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

共立薬科大学
Annu. Rep. Kyoritsu
Coll, Pharm.

学生相談室の利用状況にみる学生像

小 川 芳 子

The Student Life Seen by a Student Counsellor

Yoshiko OGAWA

(Received October 1, 1981)

Five years passed since our student counselling room had been opened. The following shows how it were utilized during the years.

First, viewed from the angle of student standing, freshman and senior clients were larger in number: the freshmen came to seek advice with respect to the findings of the adaptation screening test which they had been subjected to at the time of their entrance, and the seniors to seek career guidance or vocational counselling. Sophomore, junior and alumna clients were almost the same in number. And students' parents or mothers who seek advice about their daughters have been increasing little by little.

Second, viewed by the months in which the room were utilized, the peaks came in June and september. The clients were considerably many till October, but decreased little by little thereafter and were very few in January, February and March.

Third, classified by the contents of talking with the clients, the number of cases concerning prosecution of studies amounted to 47, that concerning future career to 219, that concerning given conditions of life to 23, that concerning adaptation to student life to 148, and the total to 437. Of all the 148 cases concerning adaptation, except 111 cases of the clients having sought advice on the results of the screening test, the remaining 47 cases were those of the students maladjusted from psychological disturbances. The total number of them amounted to only less than one percent of whole students, but they had or have grave troubles and received or are receiving psychotherapeutic treatment or counselling.

はじめに

学生相談室を開設して，5年が過ぎた。この辺で相談室にどんな話を持ち込まれることが多いのか，相談室に来る人の数は少なくても，全体を知るためにも1部のことと片付けられない意味があろう。1つの区切りとして，ここに利用状況をまとめる。

カウンセリング，相談にいくということは未だに多くの誤解がある。多くの人は何か特殊な状況，或は情況を想起したり，少し違った言動の人がいるとその人にはカウンセリングや相談が必要だと考える傾向が強いのではなかろうか。最初に5年と記したが，6年前のことだが勉強旁々実験台になってもらおうと留年した学生に声をかけ，話しに来てほしいと頼んだところ，「私は他の学生と同じです，変ってなんかいませんから話にゆく必要ありません。」と言下に断わられた経験がある。それ程はっきり拒否されたのはその時限りだが，現在でも他の人と違っていると思われるのがいやだからと，誰にも知られないようそっと来室する人は少なくない。

確かにカウンセリングが目差しているものに，その人の持つ障害や治療に目を向けることもあるが，それのみが目的ではない。否，むしろ治療も含めたその人の人間的，内面的成長に目を向

け，それを可能ならしめるよう援助する働きかけであり，教育と同じ基盤を持っていると言える。普通といわれる人々を含め全てが対象者と考える。

一方，相手と内面的経験を分け合い，ともに成長してゆこうとする試みであるから，相談室というと counselling と少し違った意味の consultation 情報や技術を伝達するといった意味も含まれる気がする。しかし薬学の巾の広さ，4年生と話をしていていつも感じることは，薬学を学びはしたが，さて社会に出てどんな方向の仕事が出来るのか，方向のあることすら分らない人が少くない。薬の事なら何でもわかるだろうと一般の人から聞かれても，わからないことばかりで不安をつのらせる。情報を整理し，自分の位置を示し，伝達することも1つの役割であろうかとも考え，あえてカウンセリングルームと名づけたかったが，相談室として開設した。

相談室が特別の人のものでないことをわかってもらう為，1年生全員に性格テストを実施，開設当初は呼び出し面接を行っていたが，最近の3年間は自ら自分の性格を知りたいと来室する人との面接に切りかえた。そして来室者は年々増加している。

カウンセリングはまず相手の話を聞くことであり，それが全てであるとさえいえる。話を受容して聞く，話を明確化させるような進行につとめる。すると話し手は自ら洞察に近づくものであり，それを助けるのがカウンセラーの仕事である。

1回1回の面談を大事にするためにも，直後必ず記録に残す。記録として整理する間に，カウンセラーとしての反省と今後の進め方を考え，時には病的なまとまりなさを感じ他機関への紹介という方向づけを行う場合もある。

この記録をもとに，5年間の内容を整理し，又新たな出発点にしようとここにまとめた。

I 来談者の構成

来談者の構成を学年別にしたものが Table I である。

来談者との面談は，話の内容により1度で終る時もあり，1年以上も続けられることもある。1回1時間，1週に1度を原則とするが月に1度になることも，時には毎日になることもある。

表の数は，1人を1件として1年かかったものも1度で終ったものも同じ1件とした。年度ごとで数えたので2年にまたがったものは2件とした。

各年度とも，1年と4年が多いのは，新入生の性格テスト結果を聞きに来ることと，就職相談があるためだが，これを除くと学年間にそれ程の差は出ないと思われる。

親に関しては，特別な働きかけは行っていないが，52年度の1件は学生との面談をして約1年後，その学生の親から直接相談を受けたものだが，この時の話は学生から受けた相談内容とは全

Table 1 学年別来談者数

	51年度	52年度	53年度	54年度	55年度	計
1 年	20人	34人	20人	61人	65人	200人
2 年	3	1	7	4	5	20
3 年	9	9	6	2	8	34
4 年	31	37	39	62	25	194
卒業生		4	3	4	7	18
親		1	2	4	5	12
計	63	86	77	137	115	478

Table 2 月 別 利 用 者 数

	51年度	52年度	53年度	54年度	55年度	計
4 月	4人	20人	12人	22人	8人	66人
5 月	6	16	8	12	46	88
6 月	17	24	23	15	47	126
7 月	5	3	16	12	21	57
8 月	0	0	0	0	6	7
9 月	35	14	18	28	16	111
10 月	5	5	21	26	19	76
11 月	8	5	12	6	19	50
12 月	3	4	10	8	7	32
1 月	2	2	7	17	0	28
2 月	3	3	6	8	12	32
3 月	5	3	7	4	3	22
計	93	99	141	158	204	695

く違ったものであり，この時は学生との話し合いの時は1度も持たなかった。親とはその後数回電話で経過報告的な形での接触を卒業時まで続けた。

53年度からの親に関しては，本人との面談の間に親とも話し合ったもので，年毎にこの件数が増加していることは，親子関係が，親離れ，子離れの出来にくい状況が増えているため，1つことにゆき詰まると両者であたふたとし相談機関が必要となるのであろう。

II. 月別にみる利用者数

月別の来談者数を Table 2 にする。Table 1 の人数と一致しないのは延人数で表わしてあるからである。1人で何回も来ればその回数分数えられている。

新学期には増加傾向があり，学期の終りに近づくにしたがい減少してくる。

6月に増加するのは1年生の性格テストの結果が出るためである。

9月は4年生が10月からの就職試験の始まりにそなえ相談が増加する。

1番暇なのは1・2・3月であるが，学期末試験を控え，寒さも加わり堪えられる人は相談室を訪れるより家路を急ぐのであろう。一方で，心理的障害の顕在化することの多いのも3月である。

Table 2 に表わした利用者数全体より，性格テスト，就職相談は1回だけで終ることが多いので両者併せて約300人を差し引いてみると，およそ400回の面談に137人となる。平均すると1件につき3回という数字が出る。勿論計算で出すべき数字ではなく，1回だけ，時には何十回となる人も毎年数名はいる。

52年度から年度をくるごとに，利用者数より件数の増加が目立つ。1人あたりにかける回数が増えているということである。

55年度1月はカウンセラーの病気入院の為，相談室が開けられなかった。その間入院先を訪れてくれたクライエントも何人かいるが，この表からは省いた。

Table 3 内容別来談者数

	51年度	52年度	53年度	54年度	55年度	計
1) 学業	8件	11件	7件	11件	11件	47件
2) 進路	29	52	42	70	26	219
3) 生活	4	6	4	2	7	23
4) 適応	22	17	22	21	66	148
計	63	86	75	103	110	437

III. 内容別にみる来談者数

来談者の話の内容を次の4つに分類し，実数を Table 3 にまとめる。

1) 学業～勉強の仕方・単位のとり方・学科の違いを聞きにきたもの。

2) 進路～再受験をしたい・就職先の探し方，決め方に関するもの・転科のことなど。

3) 生活～下宿や寮での不満・親子関係・身体的悩みなど。

4) 適応～心理障害と思われるもの・性格について自己探求を進めるため自ら来たもの。

4つの分類をしたが，広い意味からみると3までに全て含まれるのであるが，問題を1番かかえている部分の分類をしたくこの様にした。4の中には始めから適応を問題点としてきたものと，3までの問題で来室，何度か話し合いを重ねるうちに自分自身の適応の仕方が原因であると気づいていったもの，病的な範疇のものとして病院や家庭にかえしたものなど一括した。

3までに関しては1～数度の面談で終了することが殆んどで，お互いの人間性の表象部分での話し合いが主体で，自我のぶつかりあうようなことはまずない。これに対し，4の適応に関しては長期間面接に入り，時には何年にも及ぶ。短い周期で逢うことはなくても，卒業まで何か問題が起きると現われるといった形が多い。むき出された自我同志が動きの取れない状況に落入ってしまうこともある。

統計的な全体の数値からみると，進路と適応が多いが，進路に関しては4年生に就職ガイダンスを行う関係で，ガイダンス後の相談が増加するのである。

適応に関しては，1年生の入学当初性格テストを実施しその結果を聞きにくるケースをここに含めた。

進路と適応から，就職・性格テストを差し引くと4番まで殆んど同数となり，その他の話は平均して種々のことが話題になっていることがわかる。

Table 4 学　　業

	51年度	52年度	53年度	54年度	55年度	計
単位・学習	4件	8件	6件	9件	10件	37件
休　学	1			1	1	3
卒　論	3	1				4
留　年		2				2
転　科			1			1
計	8	11	7	10	11	47

内容別の分類をさらに詳しく見，それぞれの問題をかかえる学生の分析を試みる。

(1) 学業の分析

学生が対象である以上，どんな問題でも学業に関係がないとはいいきれないのであるが，その中で学業だけが問題にされ他の問題は一応表面化されてないようなもの，生活そのものには支障をきたしてないものを集めた。

学習面の相談，単位の取り方は留年した1年生に多く，教養単位の取り方がいちばん話題にされた。

薬学科と，生物薬学科の違いがわからないと，情報不足から不安感を持つ1年生もいる。

休学に関しては，進路の分類に入れた再受験と同じ土壌に立つ人もいる。どちらも現在の学校生活に満足出来ず，一方は再受験という目的意識を表面に出して相談に来るが，一方は目標が定まらず，このまま留年するのは困る，休学して何かをつかみたい，薬学を捨てる覚悟が出来ないということが多い。一応次年度戻ることを前提にしているので，休学期間中離れっぱなしにならない様，励しの連絡を時々とる。54・55年に各1名ずつあったが1年の半ばで休学し，現在1年と2年であるが非常に積極的薬学大学生として活躍している姿をみるにつけ，2人にとって休学が通過儀礼的役割をはたし，成長したことが感じられる。

(2) 進路の分析

大学を卒業し殆んどが実生活に出る岐路に立たされるわけであるから，多かれ少なかれ悩みを持たないものはない筈であるが，多くの者は友達同志，親との話し合いで将来を決めてゆく。相談室に話し合いを求めて来室するのは毎年全体の1～2割である。相談後又友達と話し合いを展開すべき道を見つけることも多いようだ。

進学か，就職かを決めるのは1，2年の間が多いであろうが，低学年では進学希望が例年5％位ある。だが実際に進学するのは1名かせいぜい2名である。卒業期までの3，4年は日々の勉強がかなり厳しく受験勉強まで手がまわらないこともあろうが，自信を失ってゆくことが最大の原因と思われる。高校期から続いている記憶にたよる勉強法は大学時代もずっと継続しなければならず，特に3年次の量は自信を失くさせるのに充分である。それに加え4年の秋，就職期に入ると周囲から将来の行き先が決まり楽しそうな話の1つも聞えてくると，経済的豊かさがほしいといった希望の方が台頭してきて進学を見あわせるといったケースも出てくる。

再受験は1年生の問題であり，(1)で記したとおり，表面には休学として出るわけだが，分類上は別扱いとした。時には後々まで芳しい結果を持たらさない場合もあるので，再受験とわかって

Table 5 進　　路

	51年度	52年度	53年度	54年度	55年度	計
進　学（大学院）		4件	4件	4件	4件	16件
再受験	1	3		3		7
資　格	•	2				2
就　職	28	43	38	63	22	194
計	29	52	42	70	26	219

Table 6 生　　活

	51年度	52年度	53年度	54年度	54年度	計
下　宿	1件	1件				2件
寄宿先（親　戚）	1	1				2
家　庭	1	1	2	1	3	8
結　婚		1				1
健　康	1	1		1	1	4
クラブ			1		1	2
交友関係			1		2	3
戸　籍		1				1
計	4	6	4	2	7	23

いて休学する場合どのように扱うべきかはまだ思考錯誤の段階である。

(3) 生活の分析

生活という分類もあいまいであるが，一応学業・進路を除き，さらに適応力に問題があると思われるものは(4)にまわし，その他のものを Table 6 の通りまとめた。

全体の数は1番少ないが，他の分類中に含めて話題としてはどの面談の中にも出てくる。

家庭に問題があると思われたものを具体的に書いてみる。

「弟が登校拒否を起しているが，自分はどのような態度でのぞむべきか。」

「親が自分に厳しく束縛する。干渉が多過ぎる。」

「薬学にきたのは親の希望で自分には向いていない。飛び出す程の勇気はない。親の考えを変えさせるにはどうすればよいか。」

これらの問題は家庭の問題として区別はしたが，本人との話し合いにおいては，「貴女自身の問題ですよ」ということを理解してもらう姿勢で話を聞く。親や周囲の人に変わってもらう為にはまず自分が変らなければだめであることを，話し合いの間に自然洞察してゆく。

55年度には2名の卒業生から，子供の問題で相談を受け1人には逢うこともしたが，専門の相談機関へ紹介をした。

健康問題として区別したものには，婦人科的悩み，心身症と思われるもので症状を身体に出すが，内科で薬をもらっても効き目がはかばかしくなく精神的原因があると思われたものである。

その他の項目は，それぞれの生活の場において不都合を感じたもの，人に聞いてもらうことによって，自分は心配だと思い込んでいることを表面に出させ，本当に悩んでいることは何であるか，それ程悩まねばならないことかを考えさせる。話をすることは解決の糸口を見つけ出す第一歩であり，問題意識を表面に出させることにつながる。カウンセラーとしては1番扱いやすい部分でもある。勿論これは学生という枠の中にいる人々が来談者であり，カウンセラー自身がその中を通り抜けてきた自信が不安感なく応対出来るからである。

(4) 適応の分析

適応という言葉の定義を事典にみると「環境や状況に適合して，環境からの要請にも応じ，しかも個体側の要求をも生かして，甚しい葛藤や不安を経験することなしに生活すること」であるから前項の(3)までのことがら全てを含めて考えられることである。

Table 7　適　　応

	51年度	52年度	53年度	54年度	55年度	計
心理障害	4件	6件	9件	3件	4件	26件
性　格	2	2	3	1	2	10
社会的不適応					1	1
性格テスト	16	9	10	17	59	111
計	22	17	22	21	66	148

適応を領域から区別すると，外的適応と内的適応に分けられる。

外的適応とは客観的にみて，社会的・文化的基準に依拠させながら他人と協調し，また他から容認される場合である。

内的適応とは，個人の主観的世界，現象的内的枠組における適応であり，自己受容・充足感・自尊感情・幸福感などがもてることである。

この内外あわせてどちらにせよ，うまくいってない状態を適応障害ととらえる。相談室として1番大きな問題をかかえている部分である。

適応障害の程度の差を時間的なものから比べると，

一過性のもの

持続的社会的不適応

慢性的な内的葛藤をもつ人格的不適応

以上の3つに分けられる。

しかも，適応と不適応は厳密に分けうるものではなく，強いて区別すればその個体の属する社会のもつ標準や規準からの逸脱の相対的大きさにもとづいて判断されるにすぎないのである。

このように曖昧さを持つ言葉を用いて分類することが妥当かどうかの懸念は残るが，適応障害ばかりでなく，性格テストの結果から自らを問いなおす，適応について積極的に考える人々を含めて適応という言葉で代表させた。

性格テスト結果を聞きに来る人々は，心理障害者からみれば対称関係にあるのではないかとさえ思えるので，これから考察する適応部分は，Table 7 にまとめた表の中から111名のテスト結果を聞きに来た人々を除いた37名について述べる。

心理障害，性格，社会的不適応と分類したが，これは結果からみて治療的カウンセリングを行い，セラピストの側で分類した言葉である。来談者の生の言葉ではないが，クライエント側で感じる不都合さを次に記してみる。

51年度……何もしたくない
　　慢然とした不安
　　自信喪失

52年度……将来に対する不安
　　試験恐怖
　　留年の不安
　　勉強が手につかない

都会生活の不安
53年度……自信喪失
無気力，なにもしたくない
不眠
食欲不振
54年度……無気力，何をするのかわからない。
対人恐怖
自己の存在感がない。
55年度……自己嫌悪
無気力
心気症

全体を見わたして共通しているのは，自分に自信がない，何をしてよいかわからない，といった無気力感を持つ人が毎年みられることであり青年期の特徴である。

エリクソンの云うように，青年期の重要な課題の1つは「自分の家族や身近かな共同体から提供されている役割—いずれもその提案者である社会が適切かつ望ましい役割とみなしているものだが—を自分のとるべき役割として受け入れうるかどうか」である。

大人が働くのでさえ，他人から認められ，何かしら社会に貢献しているという満足感を得るためという面のあることを無視するわけにはいかない。子供が勉強に励むのは彼らが同一視している親や教師が，勉強を大切なことと見なしていることに依存している。彼らは同時に勤勉に働く大人たちの態度をも無意識のうちに取り入れているのであろう。

ところが青年期になると，しばしば「何のために勉強しなければならないのか」「あくせくすることに何の意味があるのか」を疑問に思うものが出てくる。親との同一視の障害に起因する「働く態度」の混乱に目を向けない限り彼らの真の理解は望めないといわれる所以である。

相談室で来談者に対する場合，青年期の無気力を論ずる時には，時間体験，役割，勤労感覚についての考察を省くわけにはいかないわけである。それに加えて成長への信頼・成長を求めての営為，ともに変化への信頼があってはじめて有効なものとなる。青年期は幼時期と並んで変化への信頼が強く必要とされる時期であるにもかかわらず，変化が信じられなくなる危険も極めて大きいのが特徴である。

マースフィアの述べる青年の自己確立に至る過程をみると，

①然るべき選択の機会を経ての達成。

②与えられた唯一の道を受け入れて，早や早やと進む道を決めてしまって早期完了。

③選択の迷いのただ中にいるモラトリアム。

④自分らしさを見出せずに混乱の中で動きのとれなくなっている混乱状態。

以上の4つに分けることが出来る。

本学の場合，薬学という社会的に認められた役割分担が担いやすい状態が用意されている環境といえる。このため多くの学生は，マースフィアの分類からみると②の早期完了型と思われる。自分の目標と親の目標との間に不調和がなく，どんな体験も幼児期以来の信念を補強するだけであり，硬さ（融通のきかなさ）が特徴的といえる。自分自身についての評価を動揺させやすく，他者からの影響も非常に受けやすい，権威に弱く自分の判断にたよるより権威者の判断に従うこ

とを由とする。いわゆる優等生タイプの典型であり，期待に応えるべくししとして努力する学生達である。感情を自由に表現できる伸びやかさに欠けているのも特質の1つとみられる。これらはこれまで何度かのアンケートを取った全体像から導き出したものである。

アンケートをとって感じるのは，まず回収率のよいこと，全学生に対しては1977年に行った。その後は1年生のみであるが，全学年のものは70%回収され，新入生は殆んど100%が回収される。回収率のよいところは必ず教師が何らかの指示を行っている。いわれたことを，指示が強ければ強い程きちんと守る。

自分の理想像はどなたですか，という質問をしたところ，第1は友達の中に理想を求めるが，両親或は母親と答えるものが20%にのぼる。いかに親との同一視が強いかわかるであろう。

この様に早期完了群と思われる人と話をする場合，単に情報の提供だけで来談者は充分に満足することも多い。学習面，生活面，進路について1～数回の面談で終るのも，自己の信念を補強するため，参同者を求めにやってくることが多く，権威ある所としての認識から相談室が求められる部分もある。

心理障害として数えたうち，早期完了型でありながら一時的に適応状態をくずしたKさんの事例を紹介してみよう。

事　　例

54. 4～6月まで8回の面接をしたKさん。

Kさんは4年生になった4月「何か不安，それが何だかわからない，眠れない，食べられない」といった主訴で来室。

自分はこれまでの人生の中で，自分の判断は親の判断と全て一致し，何も不思議に思うこともなく過してきたが，これでよいのだろうか，親の後押があったからここまできたが，このままレールに乗りっぱなしで，結婚までさせられてしまうだろう。

友達の中には全部1人で物ごとを処理出来る人がいるが，自分はすぐ親に甘えてしまう。それで今までは全て解決がついた。

試験に出来なかったらどうなってしまうだろうと，試験前は非常に不安，ノイローゼになりそう。不安がつのって手足がしびれることもある。

話を進めてゆくうちにいろいろな不安・心配が次々に浮かび上ってくる。「それから，もっと心配なことはないかしら？」と聞くことに徹し，これまでの育ちの中で生み出されてきた考えを2人で客観的に眺めてみる。

これまでの生活の中で大きい挫折感を意識したことはない，他人のいうとおり動いていればうまくいっていた。これは自分ではない。自分の本性は怠けものである。ほっておいたらどこまで怠けるかわかったものではない。ありのままの自分など恐しくて出せない。「今はありのままではないかしら……恐いですか？」と聞くとはっとした様にだまって凝視する。

今の姿をもう1度一諸にみてみましょうね。といった会話で，自分の有りのままの姿を肯定するように面談を進める。

8回の話合いで落ち込むことはあっても，割合早く立ちなおることが出来るようになったとのこと，就職に関しても親が探してくれていること嬉しいと思うというので，素直な喜びを励まし

終結とした。

その後Kさんは，一応親が探してくれた職場より，東京でもう少し勉強をしたいと親の参同も得て病院の研修生として1年研鎖を積んで帰省。その後まもなく郷里で結婚し，現在は主婦として，彼の家業の中に溶けこむ努力を惜しまず元気に頑張っている様子である。

親から云われた行動をそのまま行っているように見えても，その1つ1つは本人の意志を通過して納得しているからこそ行動に移せるのであり，自分の行動としての責任をとる覚悟を身につけた時，早期完了型が大人としての性格として認められるのである。

Kさんの場合においても，親の意見をそのまま受け入れているように見えても，必ず本人の意志のフィルターを通過しているのであり，それを自覚出来た時，親に感謝して受け入れることも，反対して自分の意見を通すことも出来，それによって不安に落入ることもなくなったのである。

適応として分類，その中から性格テスト結果を聞きに来た111名以外の37件に関しては面談回数も多く1人1人思い出の中にきざまれ忘れられないものであり，それだけに1つにまとめて述べることは難しいのでKさんの事例として代表させてみた。他の人に関しても事例研究の形での検討を加えたいと考えている。

心理障害の中には神経症的なものから，器質的心因反応と云われるものも含み，相談室だけでは処理出来ず，病院へ送らざるを得なかったもの，そのことが卒業まで受け入れられず対立状態のまま去っていったものなど，人数はそれ程多くないが，問題の多い部分である。

まとめ

1. 来談者数を学年別に比べると1年と4年が多い。1年は性格テストの結果を聞きにくること，4年は就職相談に来るからである。

2. 利用者数を月別に比較すると6月の性格テスト結果の出た時，9月の就職試験前の利用が多い。学期始めは多いが期末になるに従い減少する。心理障害の重度のものは，期末に顕在化することが多い。

3. 来談者との話の内容を4つに分ける。(1)学業，(2)進路，(3)生活，(4)適応，進路から就職のためのカウンセリング，適応から性格テストの結果を聞きにきたものを除くと，4つに分類されたものは殆んど同数となり，特に問題が起りやすい部分はない。

4. 内容別に適応とした範疇には，心理障害を含み，治療的カウンセリングが必要となる。本学の特徴としては青年期の中でも，早期完了型が多い。

早期完了型が移行しやすい心理障害を事例として述べ，いかに成熟した大人への道を歩ませるかを考察した。

5. 5年間の利用状況は，少しずつ増加し特に1件あたりに費やす回数が増えていることは，カウンセリング・ルームとしての機能が少しずつ定着してきた為であろうか，重症な心理障害が増えた為であろうか。両者とも考えられる。6年目に入り部屋自体も新しく移転したこの機会に，5年間の反省を含め1人でも多くの方が，より成熟した大人へのステップ台として利用して下さることを願う。

参 考 文 献

1) 笠原　嘉，田山和夫編：キャンパスの症候群　弘文堂　1981。
2) R.E. ムース，岡路市郎監訳：青年期の理論　川島書店　1976。
3) アルノルド・ヴァン・ジュネップ，秋山弥永訳：通過儀礼，思索社　1977。
4) ヴィクター・W・ターナー，冨倉光雄訳：儀礼の過程，思索社　1976。
5) エリク・H・エリクソン，小此木啓吾訳：自我同一性　誠信書房
6) 東京家政大学学生カウンセリング室：学生カウンセリング室報告書　1981
7) 東京農業大学学生相談室：学生相談紀要　第1号　1976。
8) 小川芳子：留年学生に対する一視点，共立薬科大学研究年報　1978。